

6丁目 65

総事 山田 紀子
村中 真紀子
無職

胡馬は何を嘶いたか

オニ深草

向井 夷希微の夜

横山 寿美

横山 忠政

伊藤 イマ

向井 豊 昭

田舎を恐る

萩原 翔太郎

わたしは田舎をおそれる、
田舎の人氣のない水田の中に入ると、
ほそながくのびる苗の列をおそれる。
くらしい家屋の中に住まざしい人間のむれを
おそれる。

田舎の女せみちに坐つてゐると、
おほなみのやうな土壌の重みが、わたしの心

さくらくする、
土壌のくさつたにほひが私の皮膚をくろずま
せる、
冬枯れのさびしい自然が私の生活をくろしく
する。

田舎の空気は陰鬱で重くくしい、
田舎の牛触りはザラホラして気もちがわるい、
わたしはときどき田舎を思ふと、
きめのあらい動物の皮膚のにほひに悩まされ
る。

わたしは田舎をおそれる、
田舎は熱病の青じろい夢である。

日本の近代詩の記念碑的な作品といわれる
萩原朔太郎の詩集「月に吠える」が世にあら
われたのは一九一七年の大正六（二月のこと
である。~~田舎~~向井水太郎^{ミナモト}の筆名も妻希徳
と称する三十五才の男が北海道から上京した

北海道庁拓殖部林務係、札幌官林区署、札幌

と月日は

宮林区署函館分署と、およそ十年を山役人と
して働きつづけてきた彼は、三カ月後の五月、
第一詩集「よみがへり」を、七月には第二詩
集「胡馬の嘶き」を自費出版する。十年間の
労働によつて得た退職金を彼は二つの詩集に
注ぎこんだのだ。

~~五月の暮、彼は、この詩集を出版したのだ。~~
~~月天心に~~

磨かれし夜の空、
雨はれし後のかげやき、

星ことぐく生きかへり
月天心に円かなり。

~~風なきて梅かほる。
かすかなる春のとききに
伴れてかなづる銭が胸の
月天心に円かなり。~~

「月天心」の第一連

「よみがへり」の冒頭をかざる。上
京一カ月後の三月に書かれたこの詩には、朔

太郎の自由な口語体はなく、自我の悶えもない。定型の文語体にだかれ、夷希微の心はすっほりと満ちたりているのである。

「父なる神に捧ぐ」という献辞を扉にかかげているこの第一詩集は、キリスト教徒であつた夷希微の長い文学的低迷のはてに世に問われた詩集であつた。彼は正しく満ちたりていたのだ。しかし、詩人であろうとし、キリスト教徒であろうとする彼の目が、この世のひずみを映すことを忘れたわけではない。曲胤

彼は「馬糞」という詩を書き、「よみがへし」の中に収めているのだ。

馬糞

その御苑に観桜のうたげ張らるゝよき日なり。

いとよき日めよき日なり。
御苑の門にいかめしき人は立ちけり。

勲章の数燦然と光りたる

騎馬の士宮の往来ゆきまきさへいときらびやかにもの

くし。

今日しも此処に招かれし貴顯のやから
はれぐと馬車に自動車いさましく、
花のいでたち麗はしきたわやぐ人も打ちのせ
て

大路を狭くつどひ来ぬ。

5
大路のわきに居列ぐるいやしき民のやからあ
り。

多くは女小供なるまづしき装ひとりぐに、
顔もかたちもとリぐに、
いとも醜きそのやから。

やがて至尊の二方の鹵簿の近づく時なりき。
鹵簿の拝観こひねがひつどふ卑しき此のやか
ら、
ひしめき紊る途筋の秩序を保つ
警衛のひまなきつとめ。

更に見よ、電車、荷車、人もまた
とどめられたる函笥の途、
途に落ちたる馬糞うまぐそを
一つ一つに拾ひとる人のありけり。

見よや見よ。水は撒かれつ函笥の途。
塵はとどめず函笥の途。

ひとりいやしきやから人

醜みにくき姿さらしつ途のかたへに堵かきをせり。
誰か来りて捨てざるや、馬の糞なる此のやか

ら。

至仁の君はしづくと函笥を進めて近づきぬ。
至仁の君はあはれみの清き眸を
途ばたのいやしき群に注ぎけり。

至仁の君は一たびも水の撒かれし途を見ず、
塵を止めぬ途を見ず。

函笥は御苑の門に入る。

近代の中の前近代をよばく夷希微の目は、

光をかへし、きらくくと
天王寺鋸は樹の根に置かれたり。

海拔こゝに八百尺。

茸毛の馬の背の如く起伏せる

丘陵の上に群がる老弱の樹木は

今冬眠の静寂の中に

夢みる春の永久とこしほに帰らざるべき

運命の手に握られたり。

8

餌えはに餓えたるくろがねの

鋸は喰ひ入る楠の幹。

森の王者と聳え立つ

周囲まわり丈余の楠の幹。

王者は泣くか、さにあらず、

餓えたる鋸の牙の音。

巨人は忍ぶ運命の痛きさなみ。

鋸は飽く迄肉を喰み、

疲れし牙を休まする。

渴ける斧は今躍り、
巨人に残る血をすゝる。

とざろくと山鳴りて

百尺の長身は倒れたり。

巨人は死ぬる雪の上、

睡れる雪は地雷火の如き

煙をたてて天に飛びり。

あたりヲに立てる郎党の

数多の樹々も殉死する

いまはの叫び、生々なましきむくろ。

無残なる破壊の時は来れり。

三百年の森の生命いのちは

今刻々に滅び行くなり。

牙を鳴らして

鋸はかゝりぬ桂の樹、

目を光らして

斧は躍りぬ菩提樹に。

森の群雄しんぐんは白樺、
刺桐はりきりに榛の樹に
皆悉く倒れ行く。

緑のほこり皆きえて
林しく立てる雑木林の冬なれど、
群がる樹々の枝繁り
鬱とこもりし森林の
10 今し生命いのちの根に離れ
滅び行くなる様を見よ。

点々と伐株は列ぶ雪の上、
幽霊の如く截面きりめが光る中に
うごめくものは態なるか。

黒き筒袖外套に
頭かしら身体からだを包みあげ、
此処にさしきし冬の日の
明るき光仰ぎ見て、
深き喜悦に一服の煙草を吹かす
そは人間に外ならず。

彼は開墾者なり。
三百年の森の生命を犠牲として
此処に開くなり新天地。
此処に生むなり人間を。

「開墾」の「平」

「胡馬の嘶き」の冒頭の一篇である。これは
北海道の近代化、それを推進する人間への手
はなしの讃歌だろうか。そうではない。それ
もか、これでもかと言葉を積み重ねて描く

「無残なる破壊」のはての終連は暴力的な近
代化へのイロニーであり、自然に対する人間
の位置を彼は「吹雪」という詩の中であから
さまにするのだ。
これこそ
後半のみに引用
果てはみまじし

吹雪

雪が降る。雪が吹く。
晦冥の天地の間
雪が唯生きて働く。

広漠の原野の中に
一条の鉄路が眠る。

雪は降る鉄路の上に。

幽霊の如く浮べる

赤楊アキヤウの枯林の陰を

匐フクひ出でし汽車の一聯。

又

汽罐車は二台連なり

先頭の排雪機サイソウキは

凄しく雪を蹴立てぬ。

地の雪は天に降るなり、

天の雪地にも降るなる。

北海の氷を掃き去

狂ひ来る風のすさびに

雪除の罫ハシひの蓆

うくと咽び鳴きつゝ。

雪が降る。雪が吹く。

晦冥の天地の間
雪が唯生きて働く。

汽罐車の苦闘の汗は
刻々に氷り行きけり。
汽罐車の息は絶え絶え。

雪が降る。雪が吹く。
最終の悲鳴をあげて
汽罐車は終に斃れぬ。

こざかしき人の箱詰、
冷蔵の魚イサナの如く
積雪の中に埋れて
横はる列車一聯。
晦冥の天地の間
雪が唯生きて働く。

一八九七年（明治三十）国木田独歩は「国
民之友」に一つの詩を発表した。二年前の秋、

空知川流域の旅をした時の印象をうたったものである。

山林に自由存す

国木田独歩

山林に自由存す

われ此句を吟じて血のわくを覚ゆ

嗚呼山林に自由存す

いかなればわれ山林をみすてし

必

あくがれて虚業の途にのぼりしより

十年の月日塵のうち^に過おぬ

ふりさけ見れば自由の里は

すでに雲山千里の外にある心地す

皆を決して天外を望めば

立ちかたの高峰の雪の朝日影

嗚呼山林に自由存す

われ此句を吟じて血のわくを覚ゆ

なつかしきわが故郷は何処ぞや
彼処にわれは山林の見なりき
顧みれば千里江山
自由の郷は雲底に没せんとす

山役人の山は、漂泊者の觀念の山林であつた。

山役人として生きねばならぬ。夷希微にとつて、山はどうしても独歩のように見えることない。「三百坪の森の生命は、今刻々ん滅び行くもののみならず、貪しい人々の盗伐の地、

その見入るべきところを、わが田舎も、いつか、

盗伐

あるものは十年、
あるものは二十年、
ふるさとを遠く離れて
新開の漁村に住まう。

鯉網うまく当りて
一代に産をなしなる
親方の大きな家も
若干かたちであれども、

いつ迄も其日ぐうしの
小漁師の彼等が住家。

冬の海日毎に荒れて
鱈釣りに出づるよしなし。

冬の日のいたく寒くて
燐料たきしろはあまた入りけり。

16

貪乏なひまな漁師は
つまごはきかんじきかけて、

鋸を背負ひ、鉈をぶら下げ、
吹雪する中きのそく
今日も亦裏山さして
の戻り行くなり。

裏山に雑木茂れり、
官有の保安林なり。
此山を除いて外に
此あたり立木も見えず。

禁伐の保安林、
魚附の保安林、
今盗伐の惨害を
知らざる様に黙もたしけり。

吹雪にまじる鋸の屑、
油のうなりと銃の音、
漁師の腕は木に向ひ、
漁師のまなこ他ほかを見る。
胸の吹雪と荒浪は

材務官吏の魔の姿。 しんぎん 盗伐の終はつ末

森林監守

官給の洋服に
金釦光りてあれど、
帯剣のさらさらと鳴りて
巖いわつけき様は見ゆれど、
いつもはく脚はし祥はきわらんじ、
冬なればつまごはきかんじきかけて
山ぬぐる卑ひき役人。

山の木の松下にと

人夫つれ山にのほりて、

夏なれば篠竹くゞり、

冬なれば深雪フカユキこざわね、

沢さわ代しろの木々を見わけて、

一つ宛輪尺あて、

一つ宛極印打ちて、

一つ宛野帳にしるす。

伐跡を隈なく巡り、

かくれたる不正のわざに

幾人か罪人挙げて、

人の怨身に負ふ役目。

ある時は心弱くて

寛かにあしうひぬれば、

上旨の覚えよからず。

利を思ふ狡猾の民

洒さかな山とふるまひ、

黄金の花のいぢなひ
ひたぶるに欲しくはあれど、
頭はるゝ罪を虞れぬ。
いと軽き俸禄なれど
離るゝはいとぞ恐ろし。

春山に小鳥歌へど、
開墾の火入の煙
け気にかゝる山火の虞れ。
ひねもすき勞し勞して、

親める自然の影に
幽妙の美をも探れず。

現実には胸に重たし
当月の支給の旅費高。とこゝろ「
こゝろ」を「
こゝろ」の「
こゝろ」

滞在の官舎に帰り
家人は先づはきゝける
郵便の公書の有無を。
技師たちが机上の案の
煩瑣なる山の調査の

指尊書など入りてなければ、
 ほつと先づ息を休めぬ。
 つどひ来る子等を顧み、
 漸くに爐ばたにつきて、
 晚餐の膳に上りし、
 一本の酒をうれしむ。

山役人になる以前、夷希徹は「函館で英語の
 私塾をひらいていた。「幽妙の美」を探って
 いたそのころの彼の詩は「よみがへりしの中

には ^{ぬが} ^う ^や ^は ^い ^る [。]
~~かき~~ ~~拾~~ ~~ひ~~ ~~て~~ ~~み~~ ~~よ~~ ~~り~~ ^つ ^ま ^い ^ぬ

後方羊蹄山 ^の ^た ^ま ^を ^み ^よ ^り [。]

~~あら~~ ~~び~~ ~~し~~ ~~嵐~~ ~~お~~ ~~さ~~ ~~ま~~ ~~り~~ ~~て~~
~~吹~~ ~~雪~~ ~~する~~ ~~み~~ ~~冬~~ ~~は~~ ~~つ~~ ~~き~~ ~~ぬ~~。
~~咆~~ ~~り~~ ~~し~~ ~~浪~~ ~~の~~ ~~静~~ ~~ま~~ ~~り~~ ~~て~~
~~北~~ ~~の~~ ~~海~~ ~~霞~~ ~~に~~ ~~け~~ ~~ぶ~~ ~~る~~。
 春の大空つと撫でを
 巨 ^お ^偉 ^大 ^き ^人 ^こ ^の ^に ^臨 ^み ^り [。]

見よや氷の衣には
照れる日の光まばゆく
かゞやき亘る其の姿、
天降り来て立たせる神か、
あな叢雲の御簾まきて
世を岩らす皇帝か。

2/
思へ悩みの痛き日は
一歳の半ばつぎきて、
残る半ばも幾干かは

朗ら日の慰藉あらむ、
頸を高くもたぐれば
嫉しみに敵こそ寄すれ。

今ほよえみの面には
唯光榮の色見ゆらめど、

知らずや今ぞ凄じき
戦闘に負傷の名残、
名の耐の祝福今ありて
深き沈黙それぞ凱歌。

ハ洲やしまの外の蝦夷が島、
 大船に煙たゝして
 我が越えて行く後志しりつの
 沖くより陸見くさくれば、
 あなあじさ莊あじさ巖がにそり立つ
 島つ富士後しりつ方し羊蹄山やまや。

山役人となり、開拓の現実につつきつづ
 けた夷希微は「頼める自然の影に／幽妙の美

とも探れず」ほとんど詩作ができなくなつて
 しまう。十年を経てその生活を断ちきつた彼
 は、彼をしめつけていた現実への根みきはら
 すかのように、まったく新しい目で北海道を
 書きはじめたのだ。「よぬがへり」は北海道
 時代の作品も収めているが、「胡馬の嘶き」
 の作品はすべて上京後に書かれたものである。

あなあじさ莊あじさ巖がにそり立つ
 島つ富士後しりつ方し羊蹄山やまや。
 流
 悲しい事柄
 胡馬の嘶き

武者小路実篤

豊平川の堤に

腰かけて

川の面おもてを見つめてると

流れてゆく、流れてゆく、

ぴしゃくくと白浪立てながら

流れてゆく、流れてゆく、

自分をさそひこむやうに、

さそひ込まないではおかないやうに。

自分は笑った。

23

声

高村光太郎

止せ、止せ

みじんこ生活の都会が何だ

ピアノの鍵盤に腰かけた様な騒音と

固まりついたパレット面の様な混濁と

其の中で泥水を飲みながら

朝と晩に追はれて

高ぶった神経に顫へながらも

レットルを貼った武具に身を固めて

道を行く其の態は何だ

平原に來い

牛が居る

馬が居る

貴様一人や二人の生活には有り余る命の糧が
地面から湧いて出る

透きとほつた空気の味を食べてみる

そして静かに人間の生活といふものを考へる

すべてを棄てて鬼に角石狩の平原に來い

そんな隠退主義に耳をかすな

牛が居て、馬が居たら、どうするのだ

用心しろ

絵に書いた牛や馬は綺麗だが

生きた牛や馬は人間よりも不潔だが

命の糧は地面からばかり出るのでやない

都会の路傍に堆く積んであるのを見ろ

そして人間の生活といふものを考へる前に

まづちつと趣味しようとして試みる

自然に向く
人間を思ふよりも生きた者を先に思ふ
自己の王国にまたれ
悪に背け

汝を生んだのは都会だ

都会が離れられると思ふか

人間は人間の為した事を尊重しろ

自然よりも人工に意味ある事を知れ

悪に向せよ

PARADIS ARTIFICIEL!

馬鹿

白く染まるものよ

馬鹿

白く染まるものよ

~~其~~の詩は一九一一年（明治四四）、「札幌

でわづかの日を過した時の印象によって書か

山も野も明るくなれば
いつしかも衰へにける此部この部落。

所有地の権利定むる
去律の午統知らず、
山に棲むけものと共に
逐はるれば逃げて行くなり。

山は業の山獵すれど
追々に獲もの少く、

家つくり暖をくるとて
木をきれば山林の
官吏に睨めらる。

禁制の川のすなどり
密漁の鮮きいだきて
酒買ひに里に出でては
狡猾こつぱくの和人に欺され、
得る所いとも少く、
私ひそかものいよゝ多かり。

水産の官吏と

駐在の巡査の嘆に

密漁の女とは絶えがり。

密漁はアイヌもすれど

和人しやもも尚多くするなる。

年々に和人しやもは殖えれど

年々にアイヌは減りぬ。

石狩の川の鮭には

28

人エの孵化場があれど、
アイヌ等の孵化場はあらず。
そのあかし栄えし蝦夷えま、
滅び行くアイヌの族やぶら。

大正六年の一月に吠える」と「胡馬の嘶き」
——日本の詩史の大きな節目となった前者の
近代感覚、文語定型詩との絶縁——上り坂の
近代の中にあつて時流に遅れた定型により近
代を批判した妻希微の詩は、泡沫となつて消

